

地学オリンピック支援委員会

第19 回議事録

2024 年4 月1 日

委員長 田中 義洋

期 日：2024 年 3 月 23 日（土）15:00 – 16:30

形 態：オンライン

出席者：浅野、川勝、小泉、芝川、田中、富永、久田、平田、渡来（出席者 9 名で委員会は成立）

議 題

1. 令和 5 年度の活動および第 16 回日本地学オリンピックや関連イベントの報告
2. 第 16 回日本地学オリンピック予選問題の評価
3. 所属の確認と次回日程などの確認

詳 細

1. 令和 4 年度の活動報告

(1) 委員会を 1 度開催（第 18 回：2023 年 4 月 1 日）

(2) 第 15 回日本地学オリンピック予選の問題検討

第 18 回委員会およびその後のメーリングリストでの検討を経て、5 月に地学オリンピック日本委員会に「第 15 回日本地学オリンピック予選 試験問題に関する講評」を提出した。

(3) 第 16 回日本地学オリンピック本選および地学オリンピック関連イベントなどの報告

第 16 回は 1578 名が受験し、12 月の一次予選はオンライン、1 月の二次予選から会場を設けての実施を経て、3 月 12～14 日に茨城県つくば市で本選および日本代表選抜が行われ、国際大会代表者 4 名が決まった。国際大会は久々に対面形式となり、8 月 8～16 日に北京で開催される予定である。

この他、久田委員から、2023 年 8 月 31 日～9 月 3 日に福岡県宗像市で実施された日本・韓国・台湾の生徒が集う Earth Science Festival in East Asia High School Students 日本大会の報告があった。なお、2024 年の東アジア大会は、5 月に韓国で実施予定である。

2. 第 16 回日本地学オリンピック予選問題の評価

芝川委員が作成した一次予選および二次予選の問題に関する詳細な分析資料（問題数・配点や試験方式などの概要、問題に関する講評、出題問題と 5 社の地学基礎教科書との対比表）をもとに、意見交換を行った。なお、今回の分析までは、旧課程の教科書をもとに分析を行っており、次回は新課程の教科書で予選問題の検討を行っていく予定である。

一次予選問題に関する検討では、芝川委員から、形式や書式、出題範囲、内容に関して報告がなされた。形式や書式について、選択肢の数がすべて 4 つに統一され、複数の言葉の組み合わせを問う問題は 2 つの言葉を組み合わせるもののみとなり、より一層みやすく改善されている。出題範囲は、ほとんどが高等学校「地学基礎」の教科書に掲載されている内容からの出題となっているが、天体の運行などの中学理科での学習内容や地質図と走向・傾斜のような発展的な内容も一部含まれている。1 問につき 1 分以内で回答できる難易度の良問が揃っており、

地質・固体地球・海洋・気象・天文・総合の分野ごとの出題数もバランスがとれている。総合問題については、昨年の5問から10問へと増加し、高等学校「地学基礎」の教科書に記載されている内容だけでは解答が難しく、日頃からこのような分野にどれだけ関心を寄せているかが問われるものであった。川勝委員からは、1問1分で解答するオンライン形式の試験では、思考を深めることが難しいという問題提起がなされた。実際に間違いに気づいてもさかのぼって修正ができないことから受験しない生徒もいるとのこと、自分専用のパソコンがないので自宅受験が難しい生徒もいて、オンライン形式のマイナス面も浮かび上がってきた。このような負の側面に関して、オンライン形式以前に行っていた高校特例会場やジオパークや博物館などを活用した対面での試験会場設置を要望する意見も上がった。

二次予選問題についても、最初に芝川委員から報告が行われた。二次予選は、指定された会場で対面でのマークシート方式で実施され、一部を除き、選択肢は4問と統一されていた。一次予選と同様、高等学校地学基礎の教科書の内容から出題されているが、正答が複数ある問題が12と昨年の1.5倍に増え、時事問題に精通し、複数の知識を融合して解答する必要がある問題もみられるなど、一次予選よりは難しくなっている。また、一部の図については表記の仕方が分かりにくい部分がみられ、第7問の文中にある「古い世代の斑れい岩」といった表現については、受験者が戸惑う可能性が考えられるという指摘もあった。ただし、全体としてよく考えられた問題で、ますます良問が増えていると説明があった。他の委員からは、一次予選を通過した受験者を対象とした問題として、出題版や難易度は適当であるが、地学という学問分野の興味関心を高めるといふ点では、リード文をいかした設問にするとより良くなるのではないかという意見も出された。

以上の議論をもとに、5月をめどに地学オリンピック日本委員会に講評を提出することを確認した。

3. その他

これまで約10年にわたり、予選問題の分析を行っていただいた芝川先生から交替の申し出があった。それに伴い、次回の検討は、引継ぎを兼ね、小泉委員と芝川委員とで担当することを確認した。なお、新課程の教科書をそろえる必要があり、これについては学会事務局に相談することとなった、また、次回の委員会は、来年のほぼ同時期に開催できるように調整することとした。

以上